

4. モデル・カリキュラム ④

ー古典著作に学ぶー

古典から学ぶ史学概論ということで、7冊の古典を選んだ。一回の講義で1冊でもよいと思うが、講義の例を作成するための便宜上の選択である。内容は、中世から近世に関する書物が多くなってしまったが、これも筆者の知識不足から来たもので、諒とされたい。面白い古典を学生に読んでもらうことを主眼とする。

講義では、個々の歴史家が学校でどんな勉強をしたのか、どんな経験をしたのかなど、歴史家の生涯、生活の背景なども詳しく話すのが面白いだろう。歴史家たちの人間的魅力が学生を引きつける部分があるようだ。古典なのだから、知識、方法以外の何かを伝えるのではないだろうか。

第1回、第2回 マルク・ブロック、河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』（創文社、1959年）

起源からフランス革命までのフランス農村史を叙述したもの。多くの問題提起により、その後の農村史研究の模範となっている。

遡及的（逆行的・遡行的）方法について。史料の多い新しい時代から遡って調査、考察する。しかし、ブロックは古い時代から叙述している。新しい時代から遡って叙述することは可能か？ 何かメリットはあるか？ー伝説研究などに役立つか。

比較史の方法について。大きな問題でも小さな問題でも、問題を演繹的に発見できる。具体例を挙げる。

*マルク・ブロック『比較史の方法』（創文社、1978年）；ブロック『封建社会』2巻、（みすず書房、1973年、1977年）；阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』（平凡社、1974年）；青山吉信『アーサー王伝説ー歴史とロマンスの交錯ー』（岩波書店、1985年）；カルロ・ギンズブルク『闇の歴史ーサバトの解読ー』（せりか書房、1992年）

第3回、第4回 フェルナン・ブローデル、浜名優美訳『地中海』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（藤原書店、1991年～1993年）

地中海を主人公にして、その周辺、ヨーロッパ、アフリカ、大西洋の歴史まで視野にいられた大作。多くのヒントと知識が埋まっている著作。

歴史の時間を3つの時間ー長期波動、景況、事件ーに分ける。環境、空間の歴史的意味についての説明。

ブローデルがフェリペ2世時代の地中海について何が言いたいのか判らないという意見

もあるが、そもそも歴史的知識の蓄積にはどのような意味があるのか。

アナール第3世代の仕事（デュビィ、ルゴフ、ル・ロワ・ラデュリ）の紹介。

* I. ウォーラーステイン『近代世界システム』I・II（岩波書店、1981年）

第5回、第6回 ヨハン・ホンジンガ、堀越孝一訳『中世の秋』（中公文庫、1976年）

年代記を用いて、中世後期の人々の心性を明らかにしようとする試み。非常に文学的でもある。

年代記研究の歴史の概説。年代記研究がわれわれのところでは不足している。年代記の使い方がわからない。事実の確定のためだけのものか。ホイジンガやデュビィの行なうような研究にはどんな意味があるのか。

* W. ケーギ『世界年代記－中世以来の歴史記述の基本形態－』（みすず書房、1990年）；ホイジンガ『文化史の課題』（東海大学出版会、1978年）；W. サザン『歴史叙述のヨーロッパ的伝統』（創文社、1977年）

第7回、第8回 ピーター・ラスレット、川北稔ほか訳『われら失いし世界－近代イギリス社会史－』（三嶺書房、1986年）

歴史人口学に基づき、近世社会のイメージを一新させた著作。

家族復元法について。教区簿冊（洗礼、結婚、死亡）の研究では家族というものはすべて核家族だということになりはしないか。世帯規模の研究がそれを補完しているのだと思われる。教区簿冊の現物を使用して説明。イギリス、フランスの研究はあるが、ドイツに関する調査はほとんどない。

従来の歴史学と矛盾してしまうのか。イギリス革命論、大塚史学、マルクス主義史学など。

* P. グベール『歴史人口学序説』（岩波書店、1992年）；E. トッド『新ヨーロッパ大全』I・II（藤原書店、1992年、1993年）；A. マクファーレン『イギリス個人主義の起源』（リブレポート、1990年）

第9回、第10回 マックス・ウェーバー、世良晃志郎訳『支配の社会学』I・II（創文社、1960年、1962年）

類型学によって世界史を説明しようとする試み。マルクスの説明に匹敵する。支配の三類型－伝統的支配、合法的支配、カリスマ的支配－についての解説。

膨大な知識をどこから得たのか。第二次大戦前のドイツの歴史学、民族学の説明。

家父長制と家産制について。超歴史的に使われる概念だが、たとえば近世社会を例としてもうすこし整理できないか。家産官僚、家産国家、領主（家産）裁判権など。

* 若尾祐司『ドイツ奉公人の社会史－近代家族の成立－』（ミネルヴァ書房、1986年）；

上野千鶴子『家父長制と資本制』（岩波書店、1990年）

第11回、第12回 カルロ・ギンズブルク、杉山光信訳『チーズとうじ虫』（みすず書房、1984年）

研究が難しかった民衆にアプローチするためのひとつのモデル。

民衆文化について。近世がその最盛期なのか、それ以前のものの残存物なのか。

史料の発見－文書館で誰も調べていない文書にそうぶつかるものではないといわれるが、それは英仏独の中世史の状況か？ 文書館における史料の分類のされ方について。

どんな問題がありうるだろうか。－魔女、粉屋、刑吏、娼婦。

ギンズブルクのドイツ的学殖について。

*ギンズブルク『ベナンダンティ』（せりか書房、1986年）；P. バーク『ヨーロッパの民衆文化』（人文書院、1988年）；D. ラカブラ『歴史と批評』（平凡社、1989年）

第13回、第14回 網野善彦『無縁・公界・楽』（平凡社、1978年）

農村史中心の従来の歴史学への攻撃の書。

倒叙法が用いられている。子供の遊びから叙述を始めている（生活感覚）。

無縁の人々のもつ暗さ。

常識を疑う態度。

*網野『日本中世の非農業民と天皇』（岩波書店、1984年）；網野『日本の歴史をよみなおす』（筑摩書房、1991年）；網野『異形の王権』（平凡社、1986年）；石母田正『中世的世界の形成』（岩波文庫、1985年）；今谷明『天皇家はなぜ続いたか』（新人物往来社、1991年）

第15回 まとめ

何を古典から学ぶか。

方法、史料（文学作品を含む）－実行可能か。史料へのアプローチのしかた。

知識の問題。図書館の問題。

隣接諸科学（文化人類学、民俗学、精神分析学など）をどう利用できるか。

註－参考文献はきりがないうほど多いので、気が付いたものにとどめた。

討論の中で、このカリキュラムで2回で1冊を扱うのは無理であるとの意見が出た。講義なら可能かもしれないが、ゼミの場合だと3～4回必要であろうと、という。学生に教科書を買わせなければならないとすれば、これらの本の多くは高すぎるという問題もある。部分的にでもコピーして配付するには著作権の問題がある。日本の図書館の不備、学術書の価格の高さが問題の根底にある。「本を読まない」学生の知的レベルを云々するよりは、

制度上のエリート主義の害悪の方が大きい。極端な場合、自分以外は無能でよいというジャコビニズムの研究者もあり（何のための学問か）、手取り足取り教えるのが好きなポピュリズムの研究者も相手によるということもあろう。難しい問題なので思考を停止する。

（島田 勇）